

=====

GCOE NewsLetter

[No.36 2010/9/24]

-----

gCOE第10回国際研究集会の開催について  
2010年度第2回大学院生海外派遣事業について  
gCOE後期の開講科目について  
次回のオープンレクチャーについて  
2010年度第1回グローバルCOE論文賞の審査結果  
gCOE講演会の要約  
gCOE第9回国際研究集会の概要  
第30回オープンレクチャーの要約  
2010年度第1回大学院生海外派遣の調査報告

=====

■ gCOE 第 10 回国際研究集会の開催について

---

第10回国際研究集会「解釈、そのまたの名は一啓蒙期における法テキストの用法」

日程：2010年10月1日（金）～2日（土）

場所：エコール・ノルマル・シュペリール（フランス・パリ）

プログラムはgCOEのWebページに掲載しています。

<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/activity/activity01/>

---

■ 2010 年度第 2 回大学院生海外派遣事業について

---

2010 年度グローバル COE 「大学院生海外派遣プログラム」の第 2 回募集をします。

受付期間：2010 年 9 月 28 日(火)～10 月 5 日(火)16 時半

第 1 次審査[書類] 結果発表予定：2010 年 10 月 13 日(水)

第 2 次審査[面接] 結果発表予定：2010 年 10 月 20 日(水)

詳しくはグローバル COE の Web ページからご覧ください。

<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/education/education03/>

---

## ■ gCOE 後期の開講科目について

---

後期の開講科目は下記の通りです。

グローバル COE の Web ページにも掲載しています。

<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/education/education02/>

\*各論Ⅰ（水 3 限：総合 308/309 12 月 15 日は 128 講義室）

佐藤彰一特任教授、森際康友教授、大石和欣准教授

\*各論Ⅲ（木 4 限：129 講義室）

釘貫亨教授、加納修准教授

\*各論Ⅵ（木 5 限：総合 305）

佐藤彰一特任教授、松澤和宏教授、釘貫亨教授、重見晋也准教授

\*原論（集中）松澤和宏教授（129 講義室：2010 年 12 月 25 日・28 日・  
2011 年 1 月 6 日[2～5 限],1 月 7 日[2～4 限]）

---

## ■ 次回のオープンレクチャーについて

---

次回の開催は 10 月 13 日（水）になります。詳しくは今後、GCOE の Web ページでお知らせします。

---

## ■ 2010 年度第 1 回グローバル COE 論文賞の審査結果

---

グローバル COE 論文賞へのご応募ありがとうございました。

厳正なる審査の結果、2010 年度第 1 回グローバル COE 論文賞は該当作なしと決定いたしました。

第 2 回 gCOE 論文賞の応募期間は来年 2 月中旬頃の予定です。

---

## ■ gCOE 講演会の要約

---

講演者：フィリップ・ヴァルテール博士（グルノーブル第 3 大学教授・イメージネール研究所所長）

題目：「中世史に残る噂をめぐる解釈学試論－シャルルマーニュと妹の近親相姦をめぐる」

日時：2010 年 8 月 30 日（月）15 時～18 時

場所：文学研究科大会議室

中世フランスにおいて、『ロランの歌』の英雄ロランがシャルルマーニュと妹ジゼルとの近親相姦から生まれた息子であるとする噂が広まっていた。この噂がどのようにして生成・伝播し、そしてどのような意味を有していたかを、とりわけ神話学的な観点から探る試みが、講演の主題である。

ヴァルテール教授は近親相姦のテーマに焦点を定め、この噂について三つの観点からの解釈を提示する。すなわち、カロリング家が実践する近親婚に対する教会の批判というコンテクストを考慮する「史実に基づく民族学的な解釈」、中世フランス王国において神聖ローマ帝国に対抗してシャルルマーニュの価値を下げようとする動きがあった点を重視する「イデオロギーに基づく政治的な解釈」、そして近親相姦を英雄誕生との関連で捉える「神話学的な解釈」である。「キリスト教神話」の専門家でもある教授は、この最後の観点に基づき、中世におけるジゼル伝説の探求に取りかかり、ハンセン病患者になったジゼルがリス川から引き上げられた魚を食べることで病気から回復するとする伝承の存在を突き止める。かくしてジゼルはロランを「身ごもる」のだが、聖人伝史料はこの事実を覆い隠しているとする。

講演後一時間近くにわたって質疑応答が交わされ、ロランの實在の問題や、シャルルマーニュの評判を下げる試みの形成などについて議論されたが、いずれの問題に関しても写本の綿密な調査の必要を強調されていた点が印象的であった。（文責：加納 修）

---

## ■ gCOE 第9回国際研究集会の概要

---

2010年9月9日（木）～11日（土）

「ことばに向かう日本の学知—テキスト解釈の集積としての学史—」

名古屋大学文系総合館7階カンファレンスホールにて開催。

コーディネーター：釘貫 亨（名古屋大学大学院文学研究科教授・日本語学）

第9回名古屋大学グローバルCOEプログラム「ことばに向かう日本の学知—テキスト解釈の集積としての学史—」報告

9月9日から11日までの3日間、第9回名古屋大学グローバルCOEプログラム国際研究集会「ことばに向かう日本の学知—テキスト解釈の集積としての学史—」をテーマに、過ぎ去らぬ猛暑の中、開催された。初日は拠点リーダー佐藤彰一教授の挨拶のあと、カレル・フィアラ教授（福井県立大学）による「言

語作品の総合モデルと古代・中世の日本文学作品への応用」と題した特別講演が行われた。フィアラ教授は、プラハ学派以来の機能論言語学理論に立脚して、記紀神話の諸類型、万葉和歌の編集の再現、源氏物語や平家物語生成過程に見る「再文脈化」の構想が提案された。

10日、11日両日にわたる研究発表会では、古代から近代にいたるまでの日本における言語研究史の最先端の幅広い研究成果が提案、討論された。金銀珠氏は、日本文法学の近代化過程において欧語の「be動詞」解釈が形容詞をめぐる品詞分類に影響を与えたことを論じた。宮地朝子氏は、山田文法の「喚体句」の発想の淵源が心理学者ヴントの *Ausrfungssatz* (喚呼・句) に由来することを考証し、山田文法の「文(句)」定義にいたる前史を解明した。小柳智一氏は『手爾葉大概抄』の「詞＝客体的表現」、「手爾葉＝主体的表現」という今日通行の時枝誠記による解釈に疑義を呈し、本書が「詞」と「手爾葉」の二分法を目指したのではなく「手爾葉」を特徴づけることに本旨があったとした。松澤和宏氏は、ソシュールは、言われるような「一般言語学」を構想したのではなく、自然科学と一線を画した歴史的考究としての「言語科学」を構想したこと、その際語る主体の意識を媒介にして時間が濃厚に関与した共時言語学が立ち上がったとした。狩俣繁久氏は、琉球文学と並行して行われてきた琉球方言の研究史の蓄積を報告し、多様で複雑な様相を呈する同方言の研究は諸言語共同体の内外の人々の協力が不可欠であるとした。李漢燮氏は、19世紀末にソウルで発行された韓国最初の新聞『漢城旬報』『漢城週報』における外信記事の情報源であった中国や日本の新聞との関係の観察を通じて近代漢語として新たに取り入れられたものが1000語を超えたとし、韓国語語彙として定着したかどうかの判定基準に語彙研究史を利用しようと述べた。ズデンカ・シュバルツォワ氏は、詩的な表現と劇的な表現の生成プロセスを謡曲『鸚鵡小町』のテキスト分析を通じて、詩的な詞章と劇的な詞章をつなぐ精神的な相互連関を提起した。

2日目の発表会では、釘貫亨が近代的日本語研究における教養主義に代わる専門的学知の創業者として、橋本進吉を取り上げた。山東功氏は、明治前期の国語研究アカデミーの枢要の地位を占めた国学者が音義説や神代文字など荒唐無稽の学説の跳梁を抑え、言語学導入を速やかに実現させた役割を強調した。肥爪周二氏は、悉曇学が『韻鏡』を導入して鎌倉時代に大きく展開し、その後も近世期に文雄を契機に独自の自律的な展開を見せたとした。岡島昭浩氏は、近世語学諸書に見られる「軽重」の用例を渉猟し、その用法の多様性を照射した。齋藤文俊氏は、明治以後厳しい評価にさらされた近世後期の漢文訓法、佐藤一斎点の原漢文復元を目指した独自の合理性から説明した。今野真二氏は、『言海』掲出項目の和語、漢語、唐音語素と漢字表記および振り仮名、語釈などが

明治の書記言語の全般的実態と連続するのではないかとの構想を提案した。

3日間の参加者は、延べ150人を超え、連日の猛暑もものかわの盛況ぶりであったが、これはテキスト解釈の新提案、新資料の報告などが次々に提起されるなど発表内容の水準の高さを反映したものと思われる。（文責：釘貫 亨）

---

## ■ 第30回オープンレクチャーの要約

---

2010年9月15日（水）18:00～19:30 名古屋国際センタービル 15階 グローバルCOE オフィスにて

講演者：古尾谷知浩 准教授（名古屋大学大学院文学研究科・日本史学）

題目：「日本古代の戸籍・計帳と死亡人の把握」

最近、すでに死亡しているはずの高齢者が戸籍に登録されたまま残っている事案が問題となっている。マスコミは興味本位で取り上げているが、戸籍から削除する手続が届け出制に依っているのであれば、当然生じ得る事態である。現在につながる近代の戸籍制は1871年（明治4）に作られたのであるが、古代の律令国家も所謂「個別人身支配」の建前の下、戸籍を作って民衆を支配しようとしていた。今回の報告は、その実態を再検討し、「個別人身支配」の内実を明らかにしようとするものである。

古代の律令国家は、戸籍や計帳によって人々を把握していた。戸籍により氏姓・身分を確定するとともに、これを班田収授の基礎台帳として口分田を班給し、計帳を課税台帳として成人男子から調や庸を徴収したのである。しかし、行政の実態をしめす一次史料を検討すると、地方行政機構における民衆把握のあり方は、令制の原則通りにはなっていなかったことがうかがえる。

そこで、まず、令および延喜式などから制度の枠組みを押さえた上で、正倉院文書として残る戸籍・計帳や、出土文字資料にみられる関連文書を検討し、実際の戸籍計帳作成業務のあり方を明らかにする。その際、死亡人の把握という点に特に注目したい。人の死亡は人口変動の重要な要素であり、これを行政側がどのように把握したのかという点は民衆支配の面で不可欠な論点である。

こうした考察を通じて、律令国家が支配を行うための枠組みと、現実に存在する社会との間の乖離の問題や、行政機構による両者の照合、修正のあり方について検討する。

---

## ■ 2010年度第1回大学院生海外派遣の調査報告

---

神山歩未さん（文化人類学・宗教学・日本思想史）の調査報告を下記に掲載します。

「マオリの木彫り彫刻に関する解釈学的研究：ニュージーランド都市部におけるマラエとマオリコミュニティの事例から」

海外派遣プログラムにより、6月から8月までニュージーランドに渡新し、都市に生きるマオリコミュニティに参加し、彼らの日常の様子や知識を吸収する機会を頂いた。

もともとマオリは、それぞれの地方において、親族集団でつくられる **Hapu**(sub-tribe)とよばれるコミュニティを形成しており、その成員は、共通の先祖からつづく系譜を持ち、それが強いつながりを作り出していた。そして、その系譜とつながりこそが、マオリのアイデンティティの源だと言われていた。しかし、白人の入植の結果、1920年代ごろから、仕事等をもとめたマオリの都市進出が急速。現在、マオリの約80%が都市部に住んでいる。急速な都市進出は、都市で生まれ育ったマオリを生み出し、自分の出身部族をしらないマオリを生み出す結果になった。そうした都市のマオリも、現在、「マオリ」としてのアイデンティティを求め、部族の垣根を越えた新たな都市のマオリコミュニティを形成している。今回のプログラムで、私自身が訪問したマオリコミュニティも、そうした都市のマオリコミュニティのひとつである。親族集団と異なり、都市マオリコミュニティは、共通の祖先から続く系譜を基に、繋がっていない。しかし、コミュニティの成員から、そんなコミュニティが彼らにとっての **Hapu** だというコエを聞いた。そして、都市のマオリのコミュニティも、親族集団のような強い繋がりをもっていることが、見てとることができた。

このようなコミュニティでは、日々、次の世代へとマオリの知識をつたえようと、コミュニティ創設に携わったお年寄りたちにより、若い世代へと伝えられている。ここで伝えられるマオリの知識とは、マオリ語をはじめ、マオリの歌、麻の織物の制作方法、儀式の行ない方などである。

また、言葉だけではなく、私が訪れたコミュニティでも団結のシンボルとしての **Marae**（集会所）を建て、内壁面を彫刻で飾り、“マオリらしい装飾”で飾っている。

今回のプロジェクトにより、そうした都市のマオリコミュニティにおけるマオリ文化活動と、彼らのシンボルとしての **Marae**、またその装飾である木彫りの彫刻を実際に見て、話しを聞き、考察する機会を得ることができた。

今後、彼らの活動に対し、更に理解を深めるとともに、今回派遣されたオークランド大学ジェームスヘナレマオリリサーチセンターで収集した資料とともに

に、 参与観察により得られたデータを、博士論文執筆に反映させていきたい  
と考えている。

次回のメール版 NewsLetter の発行は 2010 年 10 月中旬 を予定しています。

.....

GCOE 「テキスト布置の解釈学的研究と教育」

Hermeneutic Study and Education of Textual Configuration

<http://www.gcoe.lit.nagoya-u.ac.jp/>

---

NewsLetter No.36

発行：GCOE 編集部

編集担当：平野克典

Copyright(C) 2010 NAGOYA UNIVERSITY, GRADUATE SCHOOL OF LETTERS

.....